

この素晴らしい世界に鉄華団を！！

北岡ブルー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家族の居場所を作るため、不条理な世界と戦い続けた男、オルガ・イツカ。

凶弾に倒れた彼は女神の祝福を受け、死ぬ間際に得た答えのために進み続ける――。

※しかしシリアスではない。

目次

# 1	この男に終わりを	1
# 2	この宇宙ヤクザに異世界転生を！	3
# 3	この子羊オルフェンに神のお導きを！	9
# 4	この前髪ブレードに仕事という名の日常を！	16
# 5	このトラウマに怯えるぼっちに風穴を！	24
# 6	この二人に未知との遭遇を！	30

#1 この男に終わりを

——パンパンパンツ!!——

誰もいない静かな火星の都市『クリュセ』に、無数の銃声が響く。発砲音が鳴りやんだ後に残ったのは、血の池に膝をつくスーツの青年と、後ろの二人だけだった。

「だっ…、団長…？」

オレンジ髪の少年——ライド・マッスが力なくへたりこみ、大量の涙が溢れ出る。隣にいる黒肌の青年——チャド・チャダーンも同じだ。

なぜなら、今まで彼らを、『鉄華団』を導いてきた男の灯火が、今にも消えそうだったから。

「なんて声出してやがる…ライド、オレは鉄華団の団長オルガ・イツカだぞ。このくらい何てこたあねエ…」

この紫かった白髪を持つ男：『オルガ・イツカ』は、基地で敵に囲まれている仲間のため、アドモス商会に駆け込んだ。

そこで見つけたのは、世界中に犯罪者として睨まれる中、手を差しのべてくれる旧友たち。

彼らのお陰で、家族が生き残れる可能性が見えた。無駄ではなかったのだ。今まで紡いできた道は。

だが、光が、希望という名の足掛かりが見えたその時。何者かがアドモス商会の前に刺客を送りつけ、オルガはライドを庇って何発もの凶弾を受けたのだ。

「そんなんっ…、オレなんかのために…!!」

「団員を守るのがオレの仕事だ。いいから行くぞツ！みんなが、待ってんだ。それに——」

お前に責任はないとライドを諭し、オルガは赤い足跡を残して前へと進んでいく。いつものように大きな背中を団員たちに見せつけて。

しかし、戦いに身を浸してきた少年兵^{かれ}らは悟^かつてしまう。背中^の傷^がもう手遅れである事を。だからこそ彼らは様々な感情をない交ぜに、涙をこぼすことしかできなかった。

(ミカ、やつとわかったんだ、俺たちに『たどり着く場所』なんていらねえ。ただ進み続けるだけでいい！とまんねえ限り、道は…、続く――！)

もう、痛みは感じない。耳も遠くなってきた。後ろで嗚咽を洩らす団員たちの声も、届かない。

今のオルガを動かすのは、商会へ向かう前に交わした親友との、『約束』だった。

――あやまつたら許さない。――

オルガの親友、三日月オーガス。人一倍小さな彼の力強い目は、今の際までできて忘れられない。

(ああ、わかっている)

時に脅されるように。時に決断を訪ねるように向けられた三日月の眼。

良くも悪くも、あの眼を向ける親友には最初から最後まで背中を押されてきた。

もちろん、他の団員達にも。

彼らには大きな迷惑をかけた。自分が決断を間違えたせいで何度家族を失い、涙を流させてきたことか。

それでも付いてきてくれた者たちのために、自分は示さなければならぬ。自分が得た答えを伝えるのだ。

進み続けろと。生きる限り叫び続けろと。

それが団長としての、最後の仕事。

「オレは止まんねえからよ。お前らが止まんねえ限り、その先にオレはいるぞ!!」

最期まで家族を、団員たちを想い、空高くへ吼えた男は鉄華を散らす。

前に倒れ、突き出した手。指した指から続く赤い道。その先に続くのは何か。

それを綴った男は、もういない。

#2 この宇宙ヤクザに異世界転生を!

しかし、その時オルガに不思議なことが起こった。

「——ん…っ、何だ?どこだここは…」

知覚する間もなく、オルガはいつの間にか見知らぬ場所にいた。暗黒の世界の中、小さな星が浮かぶ地平など、宇宙の中にいるようだった。

遅れて伝わってきた感触から、自分が椅子に座っていることはわかる。

「——ッ!?!」

しかし、それ以上におかしな事が山積みだ。意識のハッキリしてきたオルガは上を見上げて立ち上がり、背中をまさぐる。

「んなバカな!オレはあの時間違いなく死んでたぞ?!背中に弾を受けて——はあ!?!」

ない。背中に受けた銃弾の跡も、血も、それに当たる感触が何もない。いつも通りに着ている深紅のスーツだ。

「どうなってるんだ…、こりゃあ…!」

これが噂に聞く『死後の世界』なのか。辺りを見回すオルガには検討がつかない。もしかしたら先に死んだ団員たちも同じ目にあっていたかもしれないが、聞けるはずもない。死人に口はないのだ。

だが、オルガ^死に話しかける人間はいた。

「それは私が説明しましょう!」

「ッ!?!誰だテメエ!」

チャキツと、オルガは声のした方向に銃を向ける。

そこには、白い椅子に座る水色の髪の少女がいた。目が覚めるような綺麗な顔、カラフルな明るい服装。

銃を向けているというのに少女は眉一つ動かさず、余裕の表情だ。その表情はかつて死んだ兄貴分『名瀬・タービン』を思わせる。

その表情は、『上』にいる人間がする独特の顔だ。

(動じねえな——。腹が座ってるのか、オレが撃たないと思ってるのか)

撃つか。と物騒な考えを浮かべ、引き金を引きかけた所で、オルガは首を振る。

(いや違う、落ち着くのはオレだ。コイツを殺しちゃったらここからどう出るのかわからねえ。ミカでもそのくらい判断できんだろ)

思考を落ち着けたオルガ。判断がつけばやることは一つだ。

「――銃を向けて悪かった。何せこちとら死んだ身なんで訳が分からなくなつて、気が動転してたんだ。詫びを入れさせてくれ」

最大限の礼儀と謝罪を示すため、頭を下げる。相手が何者であれ、まずは情報がある。今までの経験則だ。

女と無縁な人生を歩んできたオルガだが、少女の纏う雰囲気が変わつたのは見てとれた。お偉いさんとの顔合わせも無駄ではなかつたという事か。

「……落ち着いたようですねオルガ・イツカさん。では率直に言います。貴方は先ほど、不幸にも死にました」

「やっぱり…、そうか」

「ええ、残念ながら」

間違えるはずもない。オルガ自身、間違いなく死んでいたと確信している。全ての感覚が遠く、細くなつていき、プツンと途切れる感覚。今まで自分たちが敵に与えてきた『終わる』感覚。

家族みんなで笑うという夢も、もう叶えられない。

そう思うと、思わず自分の胸を、自分の手で締め付けてしまう。顔を下に向けてしまう。

これが『無念』か。

「……………」

「えつと…？オルガさん？」

「…そ…」

「へ？」

水色の髪の少女が、顔をふせたまま動かないオルガに近づき髪をつつく。すると近づいた分、蚊の泣くような小さな声がよく聞こえた。「くそっ…、ちくしょう…っ！…ここまで来て…やつと気づけたつてのによ…っ！」

顔を伏せて見えないオルガの瞳から、ポツポツと涙が落ちる。その一つ一つが赤黒いスーツに吸い込まれ、消えていく。

かつては団員の期待を一身に背負い、一大組織『ギャラルホルン』の名を地に落とした鉄華団の団長。オルガ・イツカ。そんな彼も、文字通り全てを奪われれば一人の人間でしかない。

歯を食い縛り、顔を上げない男を前に、水色の髪の少女は一つの提案をする。

「それでは、その気づいた事を世界に広めてみてはどうですか？」

「はっ？ いや…、オレはもう死んでるハズじゃ——」

その先を口にする前に水色の髪の少女は言葉が続ける。

「改めまして迷える魂よ。私の名前はアクア。日本において若くして死んだ者たちの転生を担当する女神よ。あなたは日本の生まれではないけど、特別な許可をもらえたの」

「日本？ 女神？ 転生？ アンタなにいつて——」

「日本の事は置いといて…、女神はこの私。転生はアナタたちの言い方でいうと生まれ変わりのことね」

口調を柔らかくして接してきた水色の——、否。アクアを名乗る女神の『生まれ変わり』というキーワードに、オルガはある会話を思い出す。

それは、宇宙海賊ブルワーズとの戦いの後の事——

『俺の弟の…、昌弘が死ぬ前に言っていたことなんだがな。世の中には『生まれ変わり』って言葉があつて、死んだら別の誰かに産まれ直す事で新しい人生を始める…って考え方なんだそうだ。』

『明弘、その話をなんでオレに？』

『…悪い、アイツとまともに話せた話だから、残したいって思ってるのかもな。気分を悪くしたならあやまる』

『あやまることあねえよ。良いじゃねえか生まれ変わり。そういう奴らと、いつかまた会えたらいいな』

「生まれ変わり…か」

まさか、生まれ変わりが人にもらう事だったとは。と、オルガは思わず鼻で笑ってしまう

「それが嫌なら天国で永遠にのんびりするっていう選択肢もあるのだからけど…」

「いや、頼む。お願いします。オレを…転生させて下さい」

オルガは、顔を上げると両膝に手を置き、アクアを名乗る女神に頭を下げる。

その姿勢を椅子に戻ったアクアは静観し、交差した脚を切り替えて尋ねた。

「本当によろしいのですか？私が転生させられる世界は一つだけ、アナタの常識が通じない魔の世界です。そこは魑魅魍魎が行き交う地獄のようなもの。それでも行くというのですか？」

女神は目を細めて警告する。目が細くなつた事で醸し出された女神のオーラが、オルガに直接叩きつけられる。

しかし、オルガの意志が変わる事はなかった。

「アクア…さんって呼んでいいか？オレは死んで、やっと気づけたんだ。オレの、俺たちの居場所はどこかに立ち止まって終わりじゃねえ。進み続けること、それが本当の居場所だって事に」

「オレはもうあいつらに顔を合わす事はねえし、出来ねえ。死んじまったんだからな。ならオレは死んでも前に進み続けて、アイツらの『先』にいる道を選ぶ」

「それがあいつらを置いて死んじまったオレの『けじめ』だ」

アクアの水晶のように丸い瞳と、オルガの鷹を思わせる鋭い眼光が互いに交差する。

一刻置いて、アクアが立ち上がった。

「あなたの覚悟、身に染みてわかりました。それでは転生特典をお選びなさい。あなたの旅の助けになることでしょうか」

バサバサツと、手元にあった本が一枚一枚の紙になって舞い飛び、オルガの下に集結して並べられる。

紙自体見たことがないオルガは、一人でに並ぶ紙に驚き、言葉もない。

「先ほども言いましたが、転生する世界は魑魅魍魎の世界です。心して選びなさい」

紙にはオルガの文化にあわせてアルファベットの文字が書き込まれており、『筋力チート』や『永遠無敵』など、見知らぬ言葉がズラリと並んでいた。

一通り目を通したオルガは気まずそうに頭をかき、それらを指差してアクアを訪ねる。

「あゝ…、あのすんませんアクアさん。持っていくモンなんですが…」

「決まりましたか?」

「…コイツで良いですか?」

「え?」

チャキツ…と、オルガは最初に向けた銃を上向きに構えた。

「コイツはオレの相棒の…、ミカつてヤツの銃なんです。持っていてけるならオレは、コイツを選ぶ」

掲げた銃は何十年も使われ続けたせいか、細かいところに傷がついたり擦りきれてたりしていた。上から見上げてみるとさらに目立つ。

だが、この銃はまだ生きている。力を持っていくなら『ちーと』や『むてき』などの聞き慣れないものではなく、長年相棒の身を守ってきたコイツがいい。そう考えていた。

(悪いいなミカ。返し損ねちまった)

「まあいいでしょう。好きになさい」

「…ワガママいってすんません。転生の事といい恩に着ます。この恩は必ず——うおっ!」

感謝を告げるオルガの足元に緑色の魔方陣が出現し、そこから無数の光が吹き上がる。

その効果かは分からないが、魔方陣の上に立つオルガの体から重みがなくなり、どんどんと上へと浮かんでいく。何かがエイハブリアクターのように重力を操っているのだ。

「すげえ…いどうなつてんだこりゃあ…!」

オルガの目から、全てのものが小さくなっていく。アクアや自分が座っていた椅子も、今の自分から見れば小石のように小さい。

「さようなら、オルガ・イツカさん。あなたの旅立ちに栄光あらんことを」

アクアが男の門出を祝福し、両手を暗黒の空にかかげる。

すると花開くように異次元の扉が開かれ、オルガはその先に引き寄せられていった。

目指すものなど、なにもない。

それがどうした、これから見つけるさ。

「お前ら、オレは進み続けるからよ。オレがいなくなったからって止まってんじゃねえぞ!!」

#3 この子羊オルフエンに神のお導きを！

「ッ——！」

オルガの頭上に青い空と太陽の光が差す。眩しさからその光に手をかざすと、指の間から鳥の影が見えた。

続いて出迎えるのは川のせせらぎと人の賑やかな声。首を左右に向けると、西洋風の家々が建ち並んでいた。

「ここが新しい世界ってヤツか…。地球に似てるな」

オルガは不毛の土地である火星に生まれ、そこで生きてきた。地球に來たのは鉄華団が誕生してしばらくの事で、その時も諸々の事情で周りの風景などロクに見ていなかった。

改めて火星を思い出しながら見てみると、地球に似たここがどんなに恵まれているかよくわかる。

水は透明で泥色ではなく。風も優しく砂が混じっていない。子供は銃を持たず遊び回り、大人はみな暖かい笑顔を浮かべている。

自分をここに転生させてくれた人物、アクアは『魑魅魍魎の世界』と呼んでいたがとんでもない。オルガには、ここが平和な楽園のようにも思えた。

「——良いトコじゃねえか」

オルガは目を細め、どこか穏やかな顔で呟いた。

——「あく…。このすば」byオルガ——

「なんかこの町、モバイルスーツみたいな奴がわんさかいるな…」

しばらくポケットに手を入れ、この世界に見とれていたオルガだが、今は奇抜な格好をした人々に紛れてこの町一帯を散策していた

理由は単純。腹が減ってきたのだ。

この世界がどんなにいい所であろうとも腹は減る。ポケットマネーもあるし、ここがどんなものか見るついでに何か食べようと、オルガは人混みの中を歩いていく。

「よおコワモテの兄ちゃん。ウチは道具屋だよ。よかつたらなんか見てかないかい？」

「そうだな。なあオツサン。ここらで食える店知らないか？」

「それならまっすぐ行って右だよ」

「やだ、レア物なワイルド系男子っ！よかつたらウチよつてかない？」

「すみません。オレ男には興味なくて」

「残念ねえ」

「ほお、その仕立てなかなかいいねえ。貴族の人かい？」

「いや、そう言うわけじゃないんですが、珍しいんすか？」

「そりゃあ目利きできる奴にはわかるね。そんな質のいい服貴族くらいしか着ねえし、始まりの町アクセルにはめったにそんなのこねえからなあ」

「アクセルの町…か。わかりました。気いつけます」

「おかあさんヤクザ」

「こらっ！見ちゃいけません！」

「……ヤクザ？」

こうして地元の住民と言葉を交わしたのち、飲食店らしき店を発見。入店したオルガは従業員からお客として明るく歓迎される。

しかし、金を出したオルガはここで致命的な問題に直面することになる。

「これで適当なモン見繕つてくれ」

「あ、すみませんお客様。この町ではこのお金は使えません。どこの国のお金なんでしょうかコレ？」

「……は？」

そう。ここではオルガの世界の通貨・ギヤラは使えないと拒否されてしまったのだ。

店の前に出たオルガは啞然とする。

(金がねえ…だと…!?)

そう、その問題とは長い間、鉄華団を悩ませてきた資金難である。古くは設立当初の資金盗難・退職金・補修の三連星に始まり、犯罪者の金として口座を凍結される事で終わるこの問題は、下手をすればギヤラルホルンよりも因縁深い宿敵。

それが世界の垣根を越え、オルガ・イツカに襲いかかってきたのだ。「おいおいシヤレになんねえぞ…！とにかく働き口を見つけねえと！」

幼少の経験で空腹の怖さを知っているオルガは、鬼気迫る顔で近場の人間を……、気弱そうな黒髪の少女を捕まえて話しかける。

その顔はこれからの事も関わっているのと相まって、餓えた狼を思わせた。

「すまねえそこのアンタ!! 一つ話を聞いてくれねえか?」

「ひっ!? すみませんごめんなさい殺さないで売らないで!」

「殺しもしねえし売らねえよ! このどこかで戦って金の手に入る…。 そんな仕事ここらにねえか!」

「えっ? 戦ってお金が入る…? あっ…! それならえつと、この先に《冒険者ギルド》があるんだけど…」

黒髪の少女はプルプル震えながらも、控えめに指を指して《冒険者ギルド》のある方向を指す。

オルガはその先を振り向き、一際大きい建物を確認した。

「そうか…! あそこに冒険者ギルドがあるんだな。悪い助かった!」

「あっ、あのよ…ヨロシければ私と一緒に登録して——いいえ違うわこれじゃお誘いみたいになっちゃう! もつとフレンドリーにここはこう…!」

少女は何か話そうとしてたが、オルガは急ぎ故、すぐさま差した方向に走り去り、残っているのは土煙だけ。

そしてその土煙も、目をつむったままの少女…、「ゆんゆん」に見られることもなく、空しく消えていった。

——あれ…？あの人どこ？byゆんゆん——

「くそ…このままじゃヤベエ、せつかく生き返ったつてのに死んじまう…ツ！」

空は夕焼け。帰る家もないオルフェンはカラスの鳴き声をBGMに、人の少なくなった広場を歩いていった。

冒険者ギルドに辿り着いたはいいものの、そこでは《冒険者カード》という物が必要不可欠らしく、その発行にお金がかかるため、結局冒険者にはなれなかった。

いろんな所に雇ってもらおうと走り回ったのだが、見返りはゼロ。どこも間に合つてると雇ってもらえず、今ここでさまよっている。

思い出してみると、最後に食べたのはいつだろう。ギャラルホルンから逃げている間様々な対処に追われて、全く食べていなかった気がする。

「ツっ…！」

空腹で倒れそうになるものの、膝に手をつけ、意地で耐え抜いたオルガ。

このスーツは兄貴分である名瀬・タービンから昇進祝いとして贈られた品だ。本来ならすぐ着替えた所だが、金も服もないオルガにはそれすらできない。

今出来るのは、この服を汚さないよう噴水の縁を手で払い、腰をかける事くらいだ。

「仕方ねえ、また明日職探しだ…」

ガキの頃は何も食べられないのが普通だった。そう自身に言い聞かせながら息をつく。

すると、だんだん眠くなってきた。

(なんか、こんな感じ前にもあったな。そうだ。この感覚はアクア…さんに会う前にあった…切れる感覚…)

意識が遠のく。眠るように視界が細くなって、力が入らなくなつて

いく。そして――

「おっと」

女性の胸に、顔を受け止められた。

「……悪い」

強烈な間を置いて、オルガの額に一筋の汗が流れる。

女性経験のないオルガでもこれがマズイのは分かる。だが起き上がろうにも力が入らない。

「いえいえ。お疲れですか？」

胸に顔を埋められたというのに柔らかな笑みを崩さない女性は、オルガの肩を持ち、倒れた姿勢を元に戻す。オルガは臆気でも女性の姿を覚えておこうと、目を動かした。

年齢は20〜30代辺りに見える金髪の女性で、顔のパーツはなかなか整っている。濃い青色に金の淵がある帽子と肩掛けが特徴で、体を覆う白のローブが神聖さを感じさせた。

オルガはその包容力と相まって、ぐずった子供たちをあやしているメリビットさんやクーデリアを思い出す。

彼女らは今、無事だろうか。

「ああ、腹が減って力がでねんだ……」

「そうですかそうですか。これも何かのお導き。それではコレを貴方に」

女性がオルガの手を取り、何かを手には置く。その人肌ではない温かさ匂いに、オルガの目は見開かれた。

「っ…コイツは……」

それは紙に包まれたパンだった。拳大の温かさが紙を通して、心を震わせる。

「食って…、いいのか…」

「ええ。思う存分食べてください」

「……!!」

芳ばしい匂いを放つパンは、たったの二口でオルガの中に沈んだ。

何日ぶりかの食事で力がみなぎるのを感じたオルガは立ち上がり、パンをくれた女性に礼を言う。

「すまねえ…飯を食わしてもらって助かった。この恩は返す!」

「いいえ、私は何もしていません。全てはアクア様のお導きのままに…」

「…アクア様?」

「知らないのですか? 貴方が座る噴水に象られている女神像こそ、水の女神アクア様なのですよ」

オルガは後ろに振り返る。

そこには夕日に照らされた壺を高く掲げ、そこから水を噴き出している彫像の姿があった。

自分が出会ったアクアとは髪型や服装、身長などまるで違うが、その像はただ壺だけを見つめている。

「そういえば貴方、仕事を探しているんですよね?」

「は? 何でそれを?」

「アクセルの町では噂が広がるのも早いですよ? ぐうぐうお腹を鳴らしながら仕事を探し、歩き回る男がいるってね」

「んなっ…!?!」

そんなに腹をすかせていたのかと、オルガは恥ずかしさの余りに頭を手で被い、染まった頬を隠す。

そこに愛らしさを感じたのか、クスリと笑った女性は続ける。

「そんな貴方に朗報です。我らがアクア様を信仰する《アクシズ教》に入りますか?」

「アクシズ教?」

「はい。今ならアクア様の素晴らしさを説くだけでお金を貰える仕事を募集中です。いかがですか?」

「…いや、悪いのがオレは教養がなくてな。そういう仕事はオレに勤まらねえよ」

「アクア様の素晴らしさなら、私がそれについての本を貸してあげます。勉強の間に石鹸洗剤を売る仕事も受け付けているのですよ? 配れば良いだけです」

「んん……っ」

オルガは、神に対してなんの意識もすることはなかった。姿も見せない者に頼るなど、毎日を生きるのに精一杯な自分には考えられないものだったからだ。

だが、この世界の神は実際に姿を表し、死んだ自分にもう一度進み続けるチャンス……、得た答えを試すチャンスをくれた。

神に祈る気はさらさらないが、何かあの人に恩を返せる時が来たら、近い方がいい。

恩を返せずに別れることもあるのだから。

(そうだな……。受けた恩を返さなきゃオレらしくねえ……！)

「なあ、アンタの名前は何て言うんだ？」

「！っ……私の名前はセシリーです！受けてくださるのですか？」

「頼むのはこっちの方だ。金もいるし、アンタやアクア……、さんに恩を返してえ……」

オルガは、自身のこだわりである筋を通すため、神との契約を結ぶ。

かつて、三日月・オーガスという《悪魔》に乗り込んだ少年と、同じように。

「オレを……、アクシズ教徒に入れてくれ!!」

「はいっ！ではその紙にサインを！」

「紙……？は!?この包み紙サイン書かよ！」

自分が入ろうとするのを予測していたのか？オルガは思わず苦笑いしながら、ヨレヨレになったサイン書に自分の名を書き込んだのだった。

#4 この前髪ブレードに仕事という名の日常を！

この世界に来てから1ヶ月後。セシリーやアクアに助けられた恩を返すためアクシズ教に入信したオルガは、資金集めのために新しい仕事を見つけた。

そこでの朝は早い。毎日4時起きで、新入りであるオルガは3キロ先の井戸まで走り、水を汲まなければならない。それを3往復してやつと朝の分になる。

作業場所は、『モンスター』という生物がたむろする町の外側。先輩方の中には傷があるものも多く、どの人もオルガ以上の巨漢だ。

初めて会った時に明弘に勝る筋肉を持つ彼らを見て、開いた口が塞がらなくなつたのは記憶に新しい。

さて申し遅れたが、オルガが見つけた仕事というのは……。

「おうオルガ。ツルハシぶん回して頑張つてんな」
「ああおやつさん！」

壁の建築である。もつと言うと労働者だ。

先程も言ったようにモンスターのいるこの世界では、防衛のため『壁』が円を描いて町を囲んでいる。無論壁はそれを越えようとしてくるモンスターのせいで傷だらけだ。

だからこそ年に何回か、冒険者が周りのモンスターを全滅させ、再び増えるその前に壁を補強・強化する必要がある。

だがたまに、強力なモンスターが出現して死傷者が出る事もあるという。そのためこの仕事に就く者はそう多くなく、故に万年募集中なのだ。

「前は壁の中で仕事を探してたからな、外にある仕事は手付かずだった……。それに、この世界の学がねえオレにはこの仕事に向いてるツ！」

ガツンツ!!と、降り下ろしたツルハシが地面にめり込む。

今オルガが作業しているのは、地面を潜るモンスター用の壁だ。固められた地面を掘り進み、その中に壁を通すという重労働。しかし、だからといって手を抜くオルガではない。

この風景と賑わい豊かな町を守るこの仕事が、オルガはなかなか気に入っていた。今まで作る事と無縁の人生を歩んで来た反動だろうか。

そして、オルガのモチベーションが崩れないもう一つの理由がある。それは…。

「おいコラ新入りイ!!ぶっ続けで働きやがっていい加減休みやがれ!こっちに来て昼飯だ!!オメエはボーナスで大盛りにしといやるよ!」「はい!ありがとうございます!」

「へっ!べっ、別にお前の事心配していつてんじやねえんだからな!!」周りの先輩方が親身に接してくれるからだ。

汚したくないスーツの代わりに正社員用の服を与えてもらい。工具の扱いやコツ、注意すべき所など様々な課題をタダで教えてもらった。今では分からない事があれば先輩方や親方——おやつさんに聞くほど信頼している。

前にオルガは、なぜこんなに親切にしてくれるのか尋ねたことがある。

新参者が恨まれるのは名瀬の件で痛感していたし、厳しい環境という事でCGSを思い浮かべたからかもしれない。

すると巨漢たちは語ったのだ。

「なに言ってるんだよ新入り!ここじゃあチームワークが命!そんな事してたらモンスターに食われちゃうよ!いちいちいせえ事を気にしてんじやねえ!」

と笑い、オルガの背中をバシンと叩いたのだ。これが効いた。

恩を返す事を信条とするオルガの火に油を注いだのだ。信頼できる大人たちに囲まれて、気負う事がなかったのも大きいかもしれない。

そんなこんなもあって、時は夕焼け前。

ここを仕切る棟梁…オルガがおやつさんと呼ぶ人物が高台の上になり、すんぐりとした大きな声で作業の終了を伝えた。

「よおし、お前らよく頑張ってくれたな。夕焼けになればモンスターが活性化すつから今日の仕事は終わりだ。」

「ん…う…おやつさん、まだ早くないですか？いつもならまだ作業をしている気がするんですが…」

オルガが違和感を感じ、上の棟梁に話しかける。それに周りの先輩方はニヤニヤ笑っていた。

「どっかのバカのやる気が飛び火して、早く修復が終わったからな。明日はゆっくり休んで、次の日来い」

「わかりました。先輩方、おやつさんもご苦労さんでした！」

一応の理解をしめしたどっかのバカは、先輩方の工具をもらい受け、それぞれの安置場所へと置いていく。もちろんその時に水筒を渡すのを忘れない。

最後に不要品である接着土や塗料、レンガなどを持てば、ここの仕事は終了だ。

「悪いなオルガ。ゴミ押し付けちまってよ」

「そんな事はないです。ありがたくもらっていきます」

オルガはそれら全てを袋に詰めこむと、背中に背負って立ち上がった。

——このすばああああ!!byオルガ——

「よっ…と、なかなか大量じゃねえか」

夕焼けが極まる時、オルガは自分の住み処かに不要品を運び終え、一息ついていた。

ちなみに服は「汚くて使えやしねえ！オラ新入り持っていきやがれ！」と渡された作業着だ。白のタンクトップとダボダボなズボンで構成されており、花の香りと日干しの暖かさを感じる。

今のオルガの住み処は馬小屋だ。三日月が見れば「そんなオルガは見たくない」と気難しい顔をするだろうが、背に腹は変えられない。

オルガ自身も、ずっとこんな所でくすぶる気はない。まだやるべきことがあるのだ。

「さあ次の仕事だ。気合い入れてかねえとな」

——あんなに見てんだ新入り！このすばア!!——

「五番テーブルからカエルのソテーにシユワシユワ3本注文入りしましたーっ！」

「新人くん鳥の丸焼き二体焼き上がったよ！それもって三番テーブルね！」

「了解！」

日が沈み、アクセルの町の街灯が灯る頃。オルガは料理店のウェイターとして働いていた。

今の服は紳士といった出で立ちであるが、その姿に高貴さはなく、どちらかというと戦える野生のジェントルマンを思わせた。

事実、戦場で鍛えた足は寸分の狂いもない歩行を実現し、大きな料理を持ってソレは崩れない。

しかも、それを交代なしで続けられるタフネスが学も料理もないオルガをこの店に引き止めていた。

ちなみにこの店。最初に金が無くて追い出された店だったりする。「しっかしもったいないなあ。何でオルガくん冒険者やらないんだろ？ガタイいいし結構強そうなのに…。わお♪」

緑のストライプパーカーの上からピンクのエプロンを羽織った少女、リーンがホットケーキをひっくり返しながら呟く。いい出来だからか、お尻から生えるタヌキ尻尾がフリフリ揺れた。

リーンはこの町の冒険者で、それでは稼ぎが足りないとここでアルバイトをしていた。その道の勘というヤツがオルガの何かを察知したのだろう。

それに対して糸目のマスターがコーヒーを煎れて諭す。

「ここらリーン君。人とはそれぞれ道があるもの。人の選択をとやかく言ってはダメだよ？」

「ううつ、一理ある…。でも店長おく、こんなボロボロの店であの子使
い潰すのダメな気がするなあ〜」

「おい今なんつった君？」

オルガはそんな会話があるとはつゆしらず、料理を次々と運んでい
く。

すると、ある男が店長の目についた。店長の目が開眼され、親の仇
を見るように睨み付けている。

「あ。奴め…、また来おったか…！」

「ああ、あの客ですか…」

オルガもその男の顔は見飽きてるため、あきれ半分でため息をつい
ていた。その様子は「もういい加減にしてくれ」というような疲れを
感じさせる。

「オルガ君。君を雇っているもうひとつの理由だ。やつてくれるね
？」

「ああはい、わかりました。ったく、あきねえなお前も…」

オルガは、持ち上げていた皿をお客の所へ置いていくと、回り道を
する形で皿の山に近づいていく。

すると山の主はオルガの気配を察知したのか、大量の料理を食べる
のをやめてオルガの方を振り向いた。

「んん？来たなオルガ！いつも通りオレに金はねえ！今日こそはどつ
ちがアクセルの町の元締めか…、決めようじゃねえか！」

「なあダスト。お前なんで店先で追い出されねえんだ？不思議でたま
らねえよオレは」

「へっ！女のパンツを見るために滑り込みをマスターしているオレに
は、客の足下から侵入するなんざお茶の子さいさいよ！」

「お前のせいだよ客足が遠のいてるのは…、おい誰かサツ呼んできて
くれ！」

椅子の上でヤンキー座りをし、偉そうにしている青年の名はダス
ト。トサカのように跳ねた金髪と泣きボクロが特徴の冒険者で、ここ
らでは有名なチンピラだ。

昔ここで無銭飲食を働いた際、オルガに蹴り飛ばされた過去を持

ち、それ以来因縁をふっかけて邪魔してやろうとよく絡んでいた。

まさしく、両者は天敵の間柄だったのだ。

「そもそもアクセルの元締めってなんだ？ テメエの自称なんざ欲しくもなんともねえよ。ツケを払いやがれツケを」

「払うかッ!! 払わないでツケるのはオレ様の特権なんだよ存在意義なんだよ!! どうしても払って欲しけりやリーンの奴に言え!」

「仲間にツケ払えってか? ったく、そんな奴がよく冒険者やってられるモンだな」

「ヤツじゃねえですううなんか文句あるんかあ——い!!」

「上等だ。払う気ねえなら無駄食いされた店にムシヨで詫びてこい!」

冷静に睨みを聞かせ、合わせた両腕をパキパキ鳴らすオルガ。

対してムカつくアヒル口とへの字目で挑発しまくるダスト。

攻撃はほぼ同時。ダストが「あつエリス様のパンツあるぜ!」と窓を指差した瞬間、オルガが殴り飛ばした事で始まった。

そこからはまさしく、拳飛び交う店内乱戦。

後半からはダストが冒険者としての身軽さを生かして飛び回り、それをオルガが追いかける逃走劇。

オルガが靴を掴むとダストは脱いで回避し、ステーキを焼く鉄板を踏んで絶叫を上げる。

水をかけてオルガの目を潰すと、ダストはその様子を嘲笑ってバランスを崩し、股間を椅子に打ち付けた。

果てに戦いは他の従業員とタダで食べたい派の無銭飲食軍団を巻き込んだ闘争へと発展し、鮮烈を極める始末。

その戦いの結果は…。

——よっしゃあ言うぞ! このsパンパンパン! byダスト——

「……………」

真夜中。オルガは石造りの腰掛けに座り、顔を両手で覆っていた。正面には先ほどまで戦っていたダストがおり、フレンドリーに話しかけてくる。ちなみにここがどこかと言うと…。

「いやあく今日のは凄かったな〜！特にお前のアイスクリームによる突き攻撃！あれはうまかったぜ!!」

「テメエ生まれ変わらせてやろうか!？」

両者営業妨害によるブタ箱行きである。これにはオルガも銃を持ち込むプツンぶり。

流石に我慢できなかつたようで、向こう側の檻にいるダストを青筋立てて怒鳴っていた。

「ふぎけた真似しやがって！冷凍庫に閉じ込めてケリつけたつてのにサツが来た瞬間「ハイハイオレとコイツがやりました〜」って共犯扱いか!?!おかげで札付きだぞどうしてくれんだ!」

オルガの顔はもともとしかめっ面な方だ。元が底辺の生まれとあって、金の入らない状況に引きずりこんだダストを般若の顔で睨み付けている。

対してダストはどこ吹く風とばかりに横になってリラックス状態。図太いというかクズ野郎と言うべきか。

「いやあくオレの知り合いお前みたいな顔多くてさ！上手くいくと思つたんだよ!」

「そつちの話じゃねえよ!つたく…、これから馬小屋の世話や牛乳配達のバイトがあつたつてのに…」

今までゲラゲラ笑っていたダストだったが、その言葉にピシリと固まる。もう一度いうが今は『真夜中』だ。それを小窓を見て確認したダストはオルガの方を振り向き、改めて問う。

その顔は青ざめていた。

「……は？ちよつとまでオイ。お前他にも仕事してんのか?」

「ああ…、休日出勤前提で20件な…」

「ここで休め!休めよお前!仕事し過ぎ!!」

「仕事してねえと身体がなまるんだよ!」

「冒険者であるオレと対等な勝負してる時点だなまるも何も無いと思

うけどオ!？」

結局オルガにとって不本意なことには、この夜中は仕事を行えることなく終わってしまった。

ちなみに後日。オルガはリーンやマスターの弁明により檻から出ることになる。ダストはそのまま。

#5 このトラウマに怯えるぼつちに風穴を！

「フウ…」

タチの悪さでいうならトドに勝る男、ダストに苦勞させられた翌日。オルガはタンクトップとダボついたズボンの作業着姿であぐらをかき、アゴに手をやって考え事をしていた。

知らない人が見れば、鋭い目付きと相まって作戦を立てているヤクザのようにも見えるだろう。背景が馬小屋でなければもつと完璧だった。

オルガが悩んでいるのは、この世界に生まれ変わらせ、『前に進み続ける』チャンスを与えてくれた女神アクアについてだった。

そのアクアの下につくアクシズ教徒の末端として、オルガは頭を悩ませていたのだ。

「一体、どうすりゃ売れんだかなあ…」

目の前にある石鹼洗剤の山、それが三つ。それらが減らない事にオルガは頭をかいていた。

「これじゃいつまでも見習いのまんまだぞ…」

1ヶ月前、オルガは自分を助け、住み処となる馬小屋を提供してくれたセシリーの言葉を思い出す。

『入りたての貴方はまだ見習いです。正式にアクシズ教に入信するなら、石鹼洗剤を100個売り、100万エリスを稼ぐこと。それが見習いから信徒になる唯一の方法です。それでは頑張ってくださいね』
そう言つて微笑みを浮かべた彼女は、山ほどある石鹼洗剤とアクシズ教についての教本を残し、次の日にはどこかにいなくなっていた。後は自分でどうにかしろと言う事だろう。

「まさかこんな事になるなんて…。物を売るつてのは難しいもんだな…」

だが頭にシワが寄り、険しいオルガの顔から察せるように、その活動は難航した。

販売方法やアクシズ教の行動方針は、セシリーが与えてくれた教本のおかげで理解できた。

この世界の文字が読めないオルガでも分かる《絵》が基本の内容は、知識を必要とする宗教の先入観をうち壊し、オルガを驚かせた。これなら文字が読めないヤツでも理解できると、アクシズ教の配慮に感心したものだ。

前世の世界のように、周りの状況が悪いのではない。問題はオルガ自身にあった。

「なんで町の奴らは、オレのことをアクシズ教徒って信じてくれねえんだ…?」

いくら言っても、いくら宣伝しても、このアクセルの町に信じてくれる者が出てこないのだ。

セシリーにパンと寝床をもらった夕暮れ時。オルガはそれで力を振り絞り、5件の仕事を手に入れた。

すぐに販売を初めていたら違ったのかもしれないが、恩義ある人の仕事を全力でやりたいと考えたオルガは、ポテンシャルを上げようと生活圏を整える方を優先した。

その結果。

「おいおいテメエがアクシズ教徒だ?!働いているオメエがなに言っ
てやがる!悪い夢を見てんなら教会でお祓いして、ポーション飲んで
寝てやがれ!!」

「ひどい…!ひどいですそんなこと言うなんて!いくらお金がないか
らって自分を乏しめなさい!」

「お前それ他のヤツに言いふらすんじゃないぞ?!オレの終生のライバ
ルがアクシズ教徒なんてエイプリルフルでもゴメンだからな!」

「オルガ君。弱みでも握られて言わされてるんだろう?大丈夫だ。そ
んな言葉を信じるヤツなんてこの町にはいないよ。君は頑張りやさ
んだからね。所で今からダストハンバーグを焼かないか?」

「ふざけんじゃないやねえよオルガの兄ちゃん!ウソはだめだつて…、スジ
をとおすのが男だつて言ってたじゃんか!そんなウソついてもオレ
はオルガ兄ちゃんのこと信じてるからな!それがスジだ!!」

女子供からあのダストに至るまでが、オルガがアクシズ教徒だとい
うとメチャンコ否定してくるのだ。これでは石鹼洗剤を売っても、オ

ルガがアクシズ教徒ととして評価されるか怪しい。

このままでは恩義を返すどころか、アクシズ教の名前もろくに使えない。

こんな八方塞がりな状況では、オルガも頭を抱えなくなるだろう。「なんでだ、どうしてこうなったんだ？わけわかんねえぞ……！」

見知らぬ人にパンを与え、食事を与え、果てまでは仕事を与えてくれるアクシズ教徒。

見返りは戦いの捨て駒でもなく、危ない手術をさせるでもない。ただただ力を貸してくれと手を伸ばすだけ。

CGSから汚い所を除いて倍クリーンにしたような組織なのに、なぜみんなして邪険にするのか？この町に住むものが基本善人なだけに、オルガは甚だ疑問であつた。

「待てよ……セシリーの姐さんが女だ。タービンスみたく女しか入れない組織じゃねえのか？いや、それじゃあオレが勧誘された理由が分からねえし、町の奴らの反応に納得いかねえ……」

オルガは少ない知識をフル回転させて、様々な可能性や理由を思案する。しばらく考え込んだ後、オルガは一つの可能性に突き当たつた。

「もしかしたらテイワズのトコみたく、組織が一枚岩じゃねえのかもな」

その予想とは、一般的に知られているアクシズ教徒の人格が最悪という考えだ。

かつてオルガは、テイワズの傘下であるタービンスと兄弟盃を交わし、世話になつていた事がある。そのリーダーである名瀬・タービンは、未熟者である自分に真摯に語りかけ、未来を案じてくれた初めての『大きい大人』だった。

自分たちを白い目で見ず、正面から向き合い、テイワズの傘下に入る事を、そして仲間たちとの関係を『家族だ』と教えてくれた最高の恩人だった。

しかし、彼は殺された。同じテイワズの傘下であるジャスレイ・ドノミコルスという男によって。つまらない考えの踏み台として謀殺

されたのだ。

あとでその男を殺し、仇は取ったものの、名瀬が喜んでくれたかは分からないが……。

話を戻すと、この町、もしくは世間にそんなジャスレイのような奴がアクシズ教徒のスタンダードとして認識されているのかもしれない。

オルガも、初めてあったテイワズの傘下がジャスレイ率いるJTDトラストだったら、間違いなくいい印象は抱かなかっただろう。

「オレは、セシリーの姐さんに会えて運がよかったのかもしれない」
無論、今オルガが推測している考えは予想に過ぎない。だが、そう考えると一番現実的でありうる話だ。

真実を確かめるためには、上に登って見渡す必要がある。そこでもし、自分の考えが正しければ――

「ちよつと待て。オレはまた上に登って…、どうすんだ？」

そこでオルガの指針が揺れる。

「今のオレには、ミカやユージンも、昭弘もいねえ。それどころか鉄華団もねえんだぞ…？」

額を抑えるオルガの言葉は、先ほどと比べて弱々しかった。

上に行く。その結果起こった様々な憂き目を思い出してしまったのだ。最高の上がりだとして『火星の王』を目指した、あの日々のこと。

ろくに知りもしない上を目指して、結果あったのはなんだ？

テイワズの縁切り、無造作に詰められた家族の死体、大量に潰れたモビルスーツ、居場所、ホタルビ――

シノの死――

「くッ!!!」

ギリリツと歯が軋み、脳に歯が擦れる音が響く。また性懲りもなく同じ事を繰り返し、全部失うのかと警告するように。

「だから…、だからって見捨てんのか!?もし考えが正しけれりやオレは…、オレはアクアさんやセシリーの姐さんを見捨てろってのか!?」

溢れ出した過去のトラウマは行き所を失い、オルガを憤らせ叫ばせ

る。

「うるせえぞ!!」と後ろで怒鳴り声が響いたが、オルガには蚊帳の外だった。

「クソ……ちくしょう……!!違うだろ……!オレは、オレは……!」

オルガは、自分が知らない間に立ち上がっていた。そこから空気が抜けるように、干し草ベッドへと腰を預ける。

その時だった。

——パンツ!!——

「うおっ!」

オルガの腰かけたベッドから、甲高い射撃音が響いたのは。

「なっ……!?なんだ?」

オルガは、不意の事態に片足を上げたまま硬直する。下を見てみると、何個か落ちている石鹼に小さな風穴が空いていた。

「まさか——!」

即座にアレを思いだし、オルガは先程まで腰かけていた干し草を掻き分ける。するとそこには、護身用に隠していた三日月・オーガスの拳銃が口径から細い煙を吐いて横になっていた。

おそらく、トリガーに折れ曲がった茎が入り込み、オルガが腰かけたことで指のようになって拳銃を引いたのだろう。どこかの誰かのように軽い引き金だ。

「はっ、ははは……!全く、悩む事も許してくれねえのかよお前は……!」

まさかの暴発という偶然に、乾いた笑いが漏れるオルガ。いつでもコイツはオレの想像を越えていきやがると、今まで悩んでいたことが吹っ飛んでしまった。

「悪かった……。悪かったよミカ。立ち止まるこたあねえ、オレは『進み続ける』。オレが立ち止まってちゃ、お前らが先行けねえもんな」

足元に転がる一つの石鹼を拾い上げる。体の臭いや汚れを取り、緊急時には食べられるという代物。

これを作った者は飢える苦しみを知っていて、食べられるようにし

たのだろうか？

とすれば、こんなものを作り出すのにどれぐらいの道のりがあったことだろう。

自分も負けてはいられない。先にあるのは何かは知らないが、進み続けると決めた以上、降りるわけにはいかない。

オルガ・イツカは歩き続ける。

「その為の一步だ……！」

オルガは、石罅を強く握りしめる。四角いマークが刻一されたソレは、銃弾によって風穴が開けられていた。

——このくすくすばbyオルガ——

それからしばらくして十分後……

「ビツ……！ビスケツトオオオオオオオ!!!」

「んまい……！んまいわねカズマ！もつとちようだい！」

「おうち帰りたい……」

どうしてこうなった。

#6 この二人に未知との遭遇を！

(ちくしょう…！俺の…、俺の異世界生活はどこ行っちゃったんだよお…)

少年は泣いていた。憧れの崩壊に、夢と現実の違いに突き当たり。顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

彼の名前は佐藤和真^{さとうかずま}。茶色の主人公っぽい髪が密かな自慢の、死してこの世界にやってきた異邦人だ。

「クソ！クソオ!!こんな姿になっちゃまいやがって…！ビスケット…!!
ビスケットオオオオオオ!!」

「ね〜え〜オルガさ〜ん。その袋くれないとこっちのビスケット食べちゃうわよ〜?」

「なっ!」

「はむっ」

「ビ…、ビスケットオオオオオオオ!!」

しかし、そこに広がる光景はカズマが思い描いた世界^もとは違っていた。

自分に恋して手助けしてくれる美少女? 強敵との戦い? 広がる大草原?

そんなものはない。

あるものといえ、いつまでも冒険に出かけられず、お菓子を抱きしめて泣き叫ぶ頭おかしいヤクザと、それをおちよくって遊ぶ顔だけが取り柄の美少女。

そして、それを白一色の生暖かい目で見るギャラリーの皆さんだった。

「殺せええええええええええ!!もういつそのこと殺してくれええええええええええツ!!」

その状況に耐えられず、天上を見上げ、鼻水と涙をまき散らしながら叫びをこだまするカズマ。

ド田舎ニート童貞16歳。彼の心は、異世界生活一日目にして粉微塵に砕けていた。

——はあはあはあん!?このすばア!?んなこと言ってる暇あるんだったら俺を美人で性格マトモな母親と幼なじみとおねえさんと妹とライバル女子がいるbyガチギレズマ——

惨状が起きる十分前のこと。暖かい陽気の中、一房の前髪を揺らすオルガは冒険者ギルドを目指し、町中を歩いていった。

背中には金や石鹸洗剤を入れた袋が背負われ、ユサユサと揺れている。

「おおオルガじゃねえか!今日はどんな仕事をしてんだ?見たところ物運びって所か?」

「グンプさんか。まあそんなとこだな」

「よっしやあ!!今度の賭けはオレの勝ちだぜい!!」

「賭ける金も程々にしとけよ」

「あつオルガの兄ちゃん!なあなあ紙芝居見せてくれよ!」

「わりいなジョン。今日は持つてきてねえんだ」

「おれ楽しみなんだよ!毎週5時の《テツハナ団の冒険》!あれからどうなるのか気になってしかたねえんだよ!」

「ハッ、そうか。アカツキがどうすんのか、楽しみにしとけよ」

「あ…あの…、お花のお兄さん…」

「ああ、リンさんの妹のリン…ちゃんか。どうした?」

「え、えと…。これ、お花とお菓子」

「コイツをオレにくれんのか?」

「ん…うん…」

「そうか。ありがとな、リン」

道中で声をかけてくれる住人達に強面を柔らかくしたオルガは、女の子からもらった花を服の縫い目に刺し、菓子を腰にくくりつけるとその場を後にした。

念のために言っておくが、オルガがギルドを目指しているのは幼女からプレゼントをもらうためではない。

新しい情報を得るため。そして、金が足りるなら自分が冒険者になり、外の世界を冒険するためである。

金は情報料や登録のために持ってきたものだ。

「もしかしたら、この世界に飛ばされた鉄華団の団員が…、オレの家族が来てるかもしれないねえからな…」

オルガはこの1ヶ月間、様々な仕事をこなしながら団員たちの情報を集めていた。

自分がこうして生きているのだから、死んでいった家族がどこかで生きているかもしれない。そう考えるのに時間はかからなかった。

オルガは、何も無造作に仕事を取っていたわけではない。

牛乳配達の時も、町全体を周りながら前世で顔を合わせた奴がいな
いか確かめた。

馬小屋掃除やウェイターなど、顔を合わせる仕事をたくさん取り、
団員たちの特徴を伝えて情報をくれるよう頼んだ。

しかし、それでも団員たちを見つけるには至らなかった。この町に
彼らはいなかったのだ。

「つたく。こうなるんだったらLCSの一つでも持つとくべきだった
な」

オルガは今までの苦勞を思い出して頭をかき、皮肉を言う。しか
し、それでも歩みを止める事はしない。

女神アクアは自分を送る際、この世界を魑魅魍魎の世界と呼んだ。
もしかすると平和なのはこの町だけで、外は危険で溢れているのかも
しれない。

新しい世界にやって来てなお、団員達が過去のように苦しんでいる
としたら…。そう思ったオルガの目標は一つに絞られた。

「アイツらを守る。アイツらの居場所を…。今度こそオレが作ってや
る！」

そのために力を。仲間を守り、進み続ける力が欲しい。

物思いにふけていれば、もうギルドは目と鼻の先。オルガは今

日、ここで冒険者になることを決めた。
決意を新たにしたオルガは、生気溢れるたくましい顔で歩を進めるのだった。

——このすばっ♪b yアクア——

オルガが到着する七分前の事。

「えへいううえへうえっ…いえへエいうえいうえ…!!」

もはや何を言っているのか理解不能なレベルで、アクアは泣いていた。悔しさや無念をゴチャ混ぜにした顔で目の前の怨敵をブンブン揺り動かし、怒り狂っていた。

「なあんてよおおお!!何で私がアンタのオマケになんなきやいけないのオ!?一人ぐらいいてもいいんじゃない!?同じ女神がここにいて元の場所に帰すとかミラクル起きてもいいんじゃない!?」

「いや、それはさすがにムリだと思う」

「だあああああああ!!」

「揺らすんじやねえ吐くぞ!」

揺り動かされている張本人。カズマはよせばいいのに確信を突き、顔が無数の残像になる。

ここは冒険者ギルドに置かれた待ち合い所。そのテーブルの端っこで、彼らは言い争いをしていた。

カズマは冒険者になろうとここに来たのだが、冒険者になるには手数料がかかるらしく、一文無しの二人は途方にくれていたのだ。

「大体な?異世界の知識がない人間を放り込むって考えがおかしいんだよ!!なんだよジャージ一丁で放り込むって!ファンタジー感ブチ壊しじゃねえか!?初期装備も金も無しってどんなクソゲーだよ!」

「知らないわよゲームなんて!創造神様がお決めになった事なんだから私に文句いわないでくれる!」

「なんだよクソツタレがア!!こんなことならお前連れて来るんじゃないな

くて何でも出せる道具もらつとくんだつた！具体的には青は青でも金作りの手段いくらでもある青ダヌキもらうべきだった!!」

「私金ヅルだったの!?金ヅルとして寄生すること前提で巻き込まれたの!?!女神様に寄生する虫なんてエンガチヨよこのド田舎ヒキニート!

「んだとやんのかコラ駄女神コラア——ツ!!」

言い争いはヒートアップし、牙を剥く両者はやがて竜玉を集める戦士のファイトスタイルを取る。

アクアは人差し指と中指を額に当て、カズマはやめときやいいのに手のひらに力を溜めようと構えた。

各々の必殺技（エア）が放たれようとした、その時——ツ!!

《グギョルルルルルルルルルルル》

腹が——減った。

「うぐ……い……へううっ」

技（エア）が放たれてもいないのに倒れる両者。戦いと腹の空しさを現すようにホコリが舞う。

ホウキを持っている従業員が、それを邪魔くさそうな目で見ていた。

「う、ううっ……このままじゃまずいわ……ここは一時休戦よカズマ！ひとまずは飯の種を手に入れなければ飢え死にしちゃうわ！」

激戦に倒れたライバルのように休戦を求めるアクア。その顔は床のホコリで汚れていた。

「なっ！自称なんとかがマトモな事を！でもどうすんだ？俺たちに金はないんだぞ?!」

「フン。私はこの世界を統べる女神様よ！この私の手にかかれれば……ッ！」

自信ありげなアクアはヨロリと立ち上がって後ろを向き、雄々しい背中を見せて歩き出す。

カズマはその後ろ姿を、床に張り付き、下から見上げる体勢で見ていた。

「お……おおほお……!!」

こうして見ると。やつとその美しさが見えてきた気がする。

水色の髪は風にたなびいて川の如き輝きを放ち。黄色のラインと黄緑のリボンが藍色の服とのコントラストを成す。

下から見上げるプロポーションも完璧で、初恋の情熱が下半身からこみ上げてくるようだ。

特に健康的な桃色と肌色、白玉の輝きを放つお尻は最高で。我ながらよく襲わなかったなと紳士な心に感心してしまう。

「さあここに集まりし人間たちよ！私はこの世界の女神アクア！！アクシズ教が祭り上げる御神体そのものよ！！だからお願いします誰かお金を貸して下さい！こんなにたくさん人がいるなら1エリスでも大金になるはずだからあ！！」

これで頭が良ければ完璧なのに。
（あろうことか懲りもせずに女神を名乗った上に頭を下げやがったアアアツ!!）

一般的な女神とは高明で慈悲深く、人々に救いを与えるものである。断じて45度の礼をして金を恵んで貰おうとする人のことではない。

無論。その代償は高くついた。

「バカー！アホー！このマヌケー!!」

「なんで俺たちが金出さなきゃいけないんだ！」

「オレはこの前アクシズ教徒に店を食い潰されたんだぞ！」

「ウチの従業員なんて『オレはアクシズ教徒なんだ』ってトチ狂ったコト言い出したのよ!?!」

「ホントに神様なら脱げよ！神様はヌードが正装だろ!?!」

「それになんだよ重力無視してるそのクルリンパな髪型はよお!!頭デザインしたヤツ頭おかしいんじゃないのか!」

「はいてない!はいてないぞこのドスケベ!」

成したげたぜ。とキメ顔をしているアクアに、罵詈雑言の嵐が飛び交う。

中にはアクシズ教の名前を使ったせいでシンパだと勘違いした人が続出し、ビール瓶や弓矢が飛び交う始末だ。

「あ…あれ?…どうしてこうなるの?…どこかで間違えちやつた??」

「間違うどころか地雷踏んだっばいぞ!…ここは退散だ!」

様々な物が飛び交う中。パチクリと瞬きをするアクアの手を引つ張り、ギルドを出ていくカズマ。

気のいいおじいさんが投げた人をと止めてか止めようとしてくれたが、多人数の勢いを止めることは出来なかった。

——おい誰だパンツ投げたの!…ありがとうございまあす!——

「う…、ヒック…。グズつ…。スんツ…」

ギルドの冒険者から追い出される形で逃げ出してきたカズマとアクア。

特に涙脆いアクアは罵詈雑言の嵐がよほど効いたらしく、道端で座り込みぐずつたままだ。

「にやんでえ…。にやんでみんな私の事信じてくれないのお?…女神だからあ?…あまりに神々しすぎるから一般人にはわかんないのお?」

「へいへい。100パーアクアのせいだけどこれでも食って落ち着け」

さすがに泣いている女は堪えるのか、カズマは最悪の場合コツソリ食おうとしていたコンビニのお菓子をとりだし、アクアに与える。アクアは乱暴にソレを受け取ると、中のお菓子をポイポイ口の中に放り込みはじめた。

「ううっ…。いしよれへも私はヒキニートにほはしやれたりしないは…!!」

「フラグとして受け取つとくよ。あと口の中カラにして喋れっ」

心の傷を癒やすためにバカ食いを敢行している女神をよそに、カズマは空を見上げてため息をつく。

「しっかし、こっからどうするかなあー」

金も家も、今日の飯も食えぬ一文無し状態。本来ならここから成り

上がって最強勇者になるはずだったのに、どうしてこうなったのやら。

「今まで親と戦い続けた努力が報われないが仕方ない。働き口探すか」

「ええっ!?!ヒキニートが働くとか存在意義なくしちやうわよ!?!そんなのダメ!カズマが消えちやう!」

「いや概念的な存在じゃないからな?それにしても立ち直りが一瞬とは、このカズマ様でも予測つかなかったよ」

「フッフ、元氣百倍が取り柄のアクア様なんですからねっ」

それなら非常食やったかいがあるってもんだ。とカズマは軽口を叩き、フッフン鼻歌を歌いながら歩き出した。

しかしその時。

「ブダあッ!?!」

「おっと」

顔に何か固いものが当たり、弾かれるようにカズマは倒されてしまった。

「く、くそう!せっかく決まったのにこれかよ!誰だおま…え?」

「あくもうカズマ大丈夫?怪我してな…い?」

倒されたカズマが思わず怒鳴ってしまおうと同時に、言葉も詰まる。

それはアクアも同様だった。

「ああわりいな、大丈夫か?」

なんせ相手は、身長が200超えてそうな長身なのだから。

わからない場合は通勤電車のドアを思い浮かべよう。それのてっぺんにモロ顔をぶつける大きさだと言えば、その大きさがわかるだろうか。

そんな巨体からヒュンと腕が伸びてきて、カズマの手を捉える。そしてそれに驚く間もなくカズマを立たせてしまった。

「うおおおッ!?!え?なんだ!?!今何が起きた!?!」

「あー、なあ。アンタさつきからどうしたんだ?」

カズマの驚きが今さら顔に出て、男が訝しげな反応をする。その顔はこの世界の人間ではないような、彫りの深い顔立ちをしていた。

岩のように濃い褐色の肌とガツシリした体つき。目は刃物や猛獣を思わせるように鋭く、奥には金色の瞳が輝く。

トゲトゲに尖った銀髪は白い山脈を彷彿させ、ククの字に曲がった前髪は、さながら鍛え上げられた金属のよう。

白いタンクトップとダボダボなズボンを合わせて、まさしく絵に書いたかのようなワイルドさを醸し出していた。

「そっか。ええ、アタ、見ない顔してんな。ここに来たのは初めてか？」
「え？あつはいソウデス」

威圧に圧倒されたカズマは、極力刺激しないように直立した姿勢を崩さない。模範的な回答に徹し、筋肉質な腕を組む男の返事を待つ。

「そっか。オレの名前はオルガ・イツカ。ここで仕事をやってるモンだ」

驚きが抜けきらないカズマにその男：『オルガ・イツカ』は、片目をつむったニヒルな笑顔で自己紹介をした。